

美濃尾張の切支丹

柴 田 亮

美濃國に於ける基督教の布教フランシスコ・シャギエル Francisco Xavier が始めて基督教を宣へ傳へた西暦一五四九年（天文十八年）より二十一年後、ガスバル・ビレラ Gaspar Vilela が京都に布教を始めた永祿二年より十年後、伴天連ルイス・フロイス Luis Frois が永祿十二年、先に京都に於て朝廷より布教を禁止された爲に、先年京都に上洛し、足利義輝を將軍の職につけ、其勢が畿内に冠たる尾張の産なる織田信長を、岐阜城に訪づれ、京都に於ける宗教の保護を約された時に始まるのである。^(一)

信長が終始一貫して基督教を優遇した事は今更言ふまでもない事であるが、其の寵遇した理由は、神社寺院が頭初の目的は、自己の保護の爲に、戰國の略奪亂暴を防ぐ爲に置いた僧兵が、後には附近の豪族と結び、宗教家本來の職分を忘れて、恰一豪族の如く勢力を振ひ、織田信長の統一事業の大なる障礙となり、信長を激怒させた其の反動である。信長が基督教を保護したから佛僧が怒り、信長に反抗したといふ説は、全く前後を顛倒した説で、彼等が本來の職分に背き、兵仗を帯ぶる以上當然打亡さる可きものであつて、此時より兵力を備ふる大社大寺の没落は實に慌たゞしいものであつた。^(二)戰國の闘争に加はり、修羅の仲間に入つた神官僧侶の貪慾邪見のかはりに、當時の基督教の宣教師の高潔寡慾、及び説く處の新奇な宗教を無神論者の信長が大いに喜び、大いに保護を加へたので、

— 苑 史 —

基督教は京都は勿論、美濃國岐阜地方に行はれる様になつた。伴天連グレゴリオ・セス・ペデス (Gregorio de Cespedes) が西暦一五八二年 (天正十年) に美濃に來た時には、日ならずして二百名の受洗者が有り、狂熱的信仰の結果偶像破壊が行はれ、信長の長子信忠は教會建設の土地を與ふる程であつたのである。^(三)

尾張國の布教の端緒は信長の力を待つものでなく、西暦一五六九年 (永祿十二年) に大和にて洗禮を受けて、郷里の尾張國海東郡花正 (今は正則村の内) にて布教に従つたコンスタンチノ (Constantino) で、^(五) 此より數年間に約三百

人に洗禮を授けた。彼の行狀は切支丹の模範で、都の信者達迄に多くの感銘を與へた。^(六)

如斯兩國に於ける布教は甚だ好結果を修めつゝあつたが、天正十二年信長、信忠が本願寺に殺され、其の政變に際し、諸侯の一人齋藤利堯が岐阜城を占領し、又其時宣教師の住所、食堂を奪ひ、聖具を薪の用に行ひたのであつた。^(七)

此は美濃國に於ける基督教の大打撃であつたが、本能寺の變にあたり、前田玄以は信忠の命を受けて、其子三法師秀信を岐阜より尾張國清洲に移した。此時の教徒の移動に依り此地の布教が始まり、西暦一五八八年 (天正十六年) には信長の庶子で此國の國主である信雄が京都にて洗禮を受けたと言はれてゐる程で、^(八) 其の國城清洲附近には多くの信者が出來た事と考へられるが、數年後信雄は秀吉の怒に逢ひ奥洲に移邦さるゝに至つたので、基督教の保護者を失つたのである。

一方美濃國岐阜に於ては本能寺の政變にあたつて教會は大打撃を蒙つたか、其三年後池田丹後殿といふ基督教大名が美濃の地に、秀吉に依つて國換を命ぜられて此地の教會の保護者となつた。^(九) 其後三法師織田秀信卿が、本能

寺の變には歳は僅二三歳で、岐阜より尾張の清洲に移されたのであつたが、後秀吉に育てられ、十五歳の歳を迎へて元服し、父祖の城邑を受け美濃國の主となつた。西暦一五九五年 (文祿四年) 頃に岐阜にて、南蠻寺物語等に傳ふるウルガンバテレン乃ちオルガンチノ Orzorio に依つて洗禮を受け、教會の建設、病院、孤兒院の設立を爲したと言はれてゐる。^(十)

此より先、織田信雄が京都にて洗禮を受けたと言はるゝ頃、天正十五年豊臣秀吉は九州の諸豪族平定後の所置の爲に九州に赴ひたが、基督教が繁榮し、各地に神社の破壊が行はれ、當時の長崎の如きは、全く耶蘇會の管下にあリ、神佛信者は長崎より追放せられ、九州は全く一獨立國の觀を呈してゐたので、秀吉は大に驚き、宣教師に對しては悉く國外に追放せんとする處分を執り、教堂を破壊させたが、宣教師の追放はその儘になつてゐたのである。^(十一) 然るに西暦一五九六年 (慶長二年) サン・フィリップ San Philip と云ふ西班牙船が土佐國浦戸港に漂着した時、秀吉は無謀にも其貨物を沒收したので船長大いに怒り、地圖を示し西班牙國王の版圖が全世界にあまねく、其の強大を示して必ず報復するところが有ろう事を以て怒喝したのである。其時貨物沒收の爲に赴ひた増田長盛が、西班牙の廣大な領土は如何にして得たかと尋ねた時、其船長は先づ基督教の宣教師を派遣して、西教を廣め、内外呼應して其圖を奪ふのであると言つた。^(十二)

當時秀吉は大陸方面の大富源に目をつけ、フィリッピン、臺灣に入貢をせまり、朝鮮明國を略奪するの野謀があり、第二回の朝鮮征伐中にあつた。此の秀吉己の心を以て、船長の暴言を信する事は容易な事であつた。秀吉再び宣教師の退去を命じ、大阪京都附近にて禁令を冒し、大膽に宣教に従事したフランススコ會の教師並信者、二十六

名を捕へ禁教の血祭に擧げたのである。然し命を奉じて退去する教師は少數に過ぎず、多く内地にひそみ内々布教に従つたのである。畿内より遠く離れ、基督教大名を持つ美濃の地は彼等のひそむには絶好の地であつたであらう。

慶長三年秀吉が病歿したので、基督教會は又も前途に光明を見出す事になつたが、美濃國にては、慶長五年岐阜城主秀信が西軍に屬して敗をとり、教會は大なる保護者を失つたのである。^(十三)然し此の關ヶ原の戦役後徳川氏の勢力は抜くあたはざるものになり、宣教師は家康の御機嫌を伺ひに江戸に赴く様になり、關東の傳道が始まり、其の成功と共に、京と江戸との宣教師の來往が繁くなり、其途上に臨める美濃尾張に於て、宣教師が屢布教に従事する事になり、尾張に於ては西曆一六〇〇年(慶長五年)福島正則の有名な家來數名が洗禮を受け、西曆一六〇七年(慶長十二年)には尾張の國主、家康の五男松平忠吉(薩摩守)が大いに教師を清洲に於て優遇し、西曆一六二二年(慶長十七年)には名古屋の淨土宗の長老が洗禮を受け、美濃十七條城主、春日局の義理の子稻葉十兵衛の妻子家人が五十餘名洗禮を受けた。十兵衛は此時より四年前に洗禮を受けてゐたのである。^(十七)此に倣つて、美濃國大垣城主の養子石川康道も洗禮を受けたと言はれてゐる。^(十八)此の數年間は美濃尾張兩國の基督教會の最隆興期であつたと考へられる。

然るにポルトガル、スペインの南敵である和蘭人が兩國の野心を幕府に忠告する事があり、西宗眞と言ふものが家康の命を受けて、歐洲に赴き宗教の研究を遂げて歸國した。^(十九)當時は歐洲にて宗教戦争が有り、其の復命は決して基督教會の爲に有利なものではなかつたであらう。其他内外の事情は到底基督教の存在を日本に許さず、慶長十八

年に伴天連追放令が發せられ、内外の宣教師、名ある信徒は殆んど翌年海外に追放せらるゝ事になつた。^(二十)

然し教師が多少内地に潜伏して布教に従事し、美濃尾張にも屢教師が訪ずれて來たのである。西曆一六二〇年(元和六年)に伴天連ベント・フェルナンデス Bento Fernandes が尾張國一ノ宮に來た時には、尾州徳川家の第一代義直卿が此地の教徒に棄教を迫つたが、皆殉教しようとしてゐるので、最も善い家來を失ふ事を恐れて、其儘にしてをいた。^(二十一)將軍家光の時代となつては、迫害は益々激烈となり、西曆一六二四年(寛永元年)には美濃國の教徒が嚴罰に處せられ、尾張國一ノ宮では基督教徒は反基督教徒より借金 of 即時支拂を要求され、後には教徒は國主より財産を沒收さるゝに至つた。^(二十二)西曆一六二九年(寛永六年)には尾張國にて殉教を遂げたものが有つたが、此の迫害切迫の時にも布教を爲し、大いに良結果を擧げてゐるものが有つた事は、尾張國丹羽郡高木村の切支丹赦免書上狀にて知る事が出来る。今其一節を左に記さう。

清助惣領

一勘四郎

年三十八

卯ノ十月十七日ニ御赦免

右之勘四郎貳歳之年三十七年以前に市ノ宮村兵右衛門と申者當村久衛門所にて水かけ吉利支丹宗門ニ仕候と親申つたへ承候其後當村八年以前喜平治一二度吉利支丹之咄し仕聞申候

赦免書上狀の書かれた寛文五年より三十七年を溯れば寛永五年の事である。高木村にて此頃洗禮を受けた者が多く歳の幼い者であつた事を考へれば、其の父母が同じく教徒であつた事が容易に察せられる。此地で此頃洗禮を授

一 苑 史

けた人は兵右衛門と一ノ宮道官であるが、其三、四年後一六二九年(寛永八年)先の兵右衛門が息子等と共に四名、
一ノ宮にて火刑に處せられ、高木村にても九名の殉教者が有つた事がバゼスの記事に依つて知れる。^(二十六)

寛永十四年島原の亂が起り、其後教徒に對する迫害は徹底的に行はれる様になつた。此年尾張國丹羽郡諾野村に
て切支丹の一統三百人の首を切つたと言はれており、徳川義直卿は教徒の取締に精勵すると云ふので、將軍家光よ
り謝辭を給つたのである。^(二十七)

寛永十八年より幕府にては基督教の取締を大目付井上筑後守に命じ、彼は峻嚴な法が何等信者を棄教させるに効
果が無いのを知つて、緩和した方法、所謂「思威並び行はる」法、^(二十九)誘惑を多くして轉宗させる手段を用ひ、取締
に一段の進歩を見せたのである。^(三十)

斯くて正保元年に於ける教徒の召捕を見るに幕府の命に依り捕縛し、多く江戸に送られてゐる。一例を示せば、
^(三十一)

正保元年甲申春正月

晦幕府傳命鈴木嘉兵衛者係吉利支丹而無嘉兵衛者、有鈴木又右衛門、去年已死、其子權三郎與其母姉妹下獄。^(三十二)

正保元年二月朔

美濃栗崎村醫友見係吉利支丹、使足輕頭一員、卒部下、護送友見於江戸。^(三十三)

正保元年に召捕へられたもの十餘名に及んでゐるが、其中には農民や漆工及び徳川義直卿の姫君付の女中もいたの
である。其後も美濃尾張兩國に宗徒の召捕は間斷なくあつた。^(三十六)然し井上筑後守が老衰の故を以て、萬治元年切支丹

奉行の職を北條安房守に譲つた晩年頃には、全國的に少康であつて、此の期に臨んで、高木村の六右衛門と云ふも

のが明暦二年に彦左衛門に吉利支丹の法を勵めて信徒と爲し、萬治元年に吉兵衛を教化した。又喜兵治と言ふもの
が彦左衛門女房に、夫の洗禮後一年に同じく基督教を勵めて信者となした事が赦免書上狀で知る事が出来る。^(三十七)

幕府の吉利支丹奉行として北條安房守が職をついだのは、明暦三年の大村に於ける切支丹の陰謀事件の召捕人
の處置をきつかけとしてであるが、安房守は新任の熱心を以て専ら九州方面の教徒の取締に力をそゝいでゐたので
ある。然し此の間に、上述の如く高木村に於ては可成大膽な布教がこゝろみられ、つひに美濃國鹽村帷子村の寛文
三年三月の召捕を端緒として附近一體の地、尾張國丹羽郡の大體的の召捕となつた。^(四十)「正事記」の記事を左に示そ
う。^(三十九)

奥村本 林

今月(寛文元年三月)朔日 御旗本衆西尾權左衛門殿より、以使者被申上げるハ、私領分濃州志保かたひらと
申兩在所も、吉利支丹宗門の者共候よし承り候、拙者在江戸仕、御存知之通小身に候得は、領地に人鮮く指置
申候、乍恐御國境之儀に而御座候間、御家中衆に被仰付、搦させ被下候ハ、過分難有次第に御座、且ハ御公
義を大事に奉存候故奉願候、私ならざるゆへ申上候との儀也、殿様被爲聞召、安き事也と仰せられ、則御國奉
行に渡邊新左衛門、定輕大將田邊四郎右衛門、御代官衆に勝野太郎左衛門、御目付には鳥居傳右衛門、五十人
御目付衆一兩人、手代四、五人、捕手之者數十人時刻を移さず馳來り、搦捕るへき旨被仰付、夜中に名古屋を出、
未明にかしこに至り、熊手立をして、吉利支丹共廿四人壹人も不殘搦捕、四日の夜つれ来る。又犬山の城下五
郎丸といふ在所に伴天連壹人有て、成瀬信濃守方より搦出す、其外にも美濃境に有之とて搦に遣さる。十五日
の夜は五十九人搦來るよし也、其後も拾人二十人方々より搦來るよし也、幾十人ともしかとは知れず。^(四十一)

美濃尾張の切支丹 (柴田 亮)

一 苑 史 一

とあり。幕府の記録には其前日の事と爲し、教徒の數を廿三人としてゐる。^(四十二)斯くて幕府よりは、大目付が教徒査檢の爲に下向し、北條安房守は九州の西教徒取締より目を此地に向け、五月晦日には安房守より海保彌兵衛が祕傳を授けられて切支丹奉行がもうけらるゝ事になつた。^(四十三)瑞龍公御治世記等の「公義吉利支丹奉行北條安房守より傳受有之、彼宗の書物等祕決有之云々」といふ祕決の書は恐らく契利斯將記の筑後守伴天連へ不審を掛け、申詰め、こゝばせ申候論議」等のもので有つたであらう。

斯くて宗門改が行はれ、百姓町人召使等は、宗門一札といふ寺院よりの基督教信者でない證明書を得て其々の役所に出す事になつた。^(四十四)此年高木村の者も御僉儀にかゝつたものであるが、當時ころんだ者(背教者)は許されたもので、寛文三、四年に數度に別れて歸郷してゐる。^(四十五)然るに四年十二月に至つて、元年以來の切支丹二百餘名が名古屋にて殺された。^(四十六)此等は飽迄信仰を貫ひて殉教した人々である事が察せられる。此年尾張國葉栗郡北方及び附近の數多の村々の百姓が切支丹となつたので、美濃國笠松にて數十名を打首とした。^(四十七)尾張葉栗見聞集は笠松の切支丹の遺蹟に就いて次の如く述べてゐる。^(四十八)

大臼塚由來之事

濃州羽栗郡笠松の下に續て藤掛と三ツ屋との境、木曾川堤添ひに松の古木あり、里人呼て大臼塚といふ、切支丹輩斬罪せられし舊跡なり。古老の傳説に切支丹の者多く斬罪の節、歷々の人も有し由、皆悦で討れけるよし、其中鼠と化して樹木にのほりしを、駕來り抓ミ去ると云傳へたり。

大臼塚の大臼はデウス(Dieu)乃神の意である。皆喜び勇んで殉教したのであつた。此年幕府は全國の諸大名に對し專

任の基督教取締の職をもうける様に令したのであるが、尾藩にても其の翌年正月より寺社奉行をもうけて、切支丹奉行の職を引繼いだ。^(五十一)新奉行は新任の銳氣を以て、先々切支丹の取調を初め、教徒の年齢、受洗の年月、御僉議の

月日の取調書の作製を命じた。^(五十二)丹羽郡高木村の赦免書上狀と稱されてゐる「丹羽郡高木村御赦免ニ成罷歸り候百姓」の二卷は、此取調書の下書であらう。此を以て教徒の檢束を初め、高木村及和田勝佐村の切支丹妻子百數十名は

一ヶ月半以上四ヶ月間以内の多くの日時を牢舎に暮した。^(五十三)

一方切支丹で無い者の取締も嚴重を極め、尾藩全般の宗門改を令し、諸士以下百姓町人は年二回の宗門一札をそれの頭支配に、或は庄屋、町年寄に出す事になつた。^(五十四)

此宗門證明の特權が寺院に與へられたので、佛僧達はゐながらにして信徒を得る事になり、此以來寺院が平和の深い眠に就く事になつた。然に水戸藩に於て此の年、破戒僧侶の寺院が整理され、後神道發揚の爲に、寺院の外に神官に宗門一札の特權を與へた事は、明治維新に於ける廢佛棄釋の先駒を爲すもので、戰國末年以來三巴となつて鬭争して來た神佛基の三宗教の内、基督教は信長の保護を得て、大いに繁榮したのであるが、天正十五年の秀吉の禁教令より衰微の徵が現はれ、慶長十九年の嚴禁より寛永十四年の島原の亂を経て迫害は徹底的に行はれ、今や其の氣息は奄々として正に絶ようとし、秀吉の基督教禁止頃より漸く呼吸を取戻した神佛兩教の内、今や佛教は徳川幕府より宗門改の特權を附與され、各地に於て神官の宗旨まで僧侶が證明する事になり、神道に對し君臨する事になつたが、此頃より神道も擡頭し來り、王政復古の潮流に棹して維新に至り、佛教は基督教同様に外教であるとの名の下に壓服され、各地に於て佛寺は破却され神道のみ時を得顔であつた。

一 苑 史

遮莫寛文五年尾藩に於て、基督教の取締が嚴重で、切支丹の多く出た尾張國丹羽郡葉栗郡は、多くの給人で土地を所有してゐては取締に不便であると言ふので、大部分を代官地とした。^(五十六) 吏事隨筆に寛文七年七月前々切支丹の者男女七百四十五人外乳呑子十四人が召捕入牢させられた事が記されてゐる。^(五十七) 此は一度に召捕えられたものでなく、「高木村吉利支丹妻子追込之者飲米の覺」に見るが如く、寛文五年寺社奉行設置後に、切支丹及び其妻子を次第く々に取調べ此年迄に七百數十名が召捕られたのであらう。瑞龍公御治世記等に、寛文七年十月切支丹宗門徒二千人が斬罪牢拂された事が記されてゐるが此は元年以來の尾州の召捕の概計を述べたものでなからうか。斯くて此年尾州管下に於ける切支丹の取締も一段落を遂げたので翌寛文八年より宗門改は年一度となつた。^(五十九) 年に兩度の宗門改を行つたのは基督教の最も盛で有つた九州地方に萬治二年より行はれた他に今其例を知らない。

尾濃葉栗見聞集及び金府紀較補遺に依ると尾張國葉栗郡十二ヶ村、美濃國羽栗中島兩郡合せて廿六ヶ村、冬務郡十三ヶ村、方縣郡三ヶ村、厚見郡四十七ヶ村、安八郡廿八ヶ村、多藝郡四ヶ村、不破郡三ヶ村、石津郡十二ヶ村、池田郡四ヶ村、大野郡十三ヶ村、本巢郡十二ヶ村、山縣郡一ヶ村、武儀郡三十六ヶ村、加茂郡二十一ヶ村、可兒郡三十三ヶ村、惠那郡十一ヶ村、總計美濃國二百數十ヶ村より切支丹が出た事を記してゐる。基督教の中心地九州畿内より遠く離れた美濃國尾張國に於て、斯くの如く基督教の傳播の範圍が廣く、斯くの如く多くの切支丹を出した事は、日本基督教史上見逃し得べからざる事である。

美濃尾張の切支丹については、帝國學士院紀事第四卷第二號

M. Avenet and R. Shibata : Some Confirmatory Light from Japanese Sources upon the Records of Christian Missions.
V. Documents and Legends from Mino and Owari

を御参照せられ。

本稿は比較的世に知られてゐない、地方材料の紹介のつもりで草しました。外國文獻の引用につき致らざる點が多いと思ひます。將來何時かは補正する覺悟です。

註

(一) 村上直次郎博士譯『耶蘇會士日本通信』下卷三〇、五九頁參照

(二) 平泉澄博士「中世に於ける社寺と社界との關係」

(三) 村上博士の御教示に依る

(四) 『耶蘇會士日本通信』下卷、二四頁參照

(五) 同上、二三五頁參照

(六) 同上、三六三頁參照

(七) 村上博士の御教示に依る

(八) Michel Steichen : — The Christian Daimyos. P. 137 以下略 — Steichen.

(九) Steichen, P. 9 訂正増補『日本西教史』上卷四七〇頁

(十) Steichen, P. 182.

(十一) 日本歴史地理學會編『安土桃山時代史論』の村

美濃尾張の切支丹 (柴田 亮)

上博士「安土桃山時代の基督教」參照

(十二) 『安土桃山時代の基督教』及『日本西教史』下卷十七頁

(十三) Léon Pagés : — Histoire du la Religion Chrétienne au Japon. P. 27. 以下略 — Pagés, P. —

(十四) Pagés P. 158.

(十五) Pagés, P. 226.

(十六) 『寛政重修諸家譜』第四輯百八十八頁參照

(十七) Pagés, 226.

(十八) Pagés, Steichen, P. 242.

(十九) 『通航一覽』

(二十) 『大日本史料』第十二編之十三及十六

(二十一) Pagés, P. 441.

(二十二) Pagés P. 483

美濃尾張の切支丹 (柴田 亮)

八四

(二十三) Page. P 583.

(二十四) Page. 714.

(二十五) 小島三保次氏藏

丹羽郡高木村

御赦免被成罷歸リ候百姓

清助惣領

一勘四郎

年三十八

卯ノ十月十七日に御赦免

右之勘四郎武藏之年三十七年以前ニ、市ノ宮村兵右衛門と申者、當村久衛門所ニ而水かけ、吉利支丹宗門ニ仕候と親申つたへ承候、其後當村八年以前喜平治一二度吉利支丹之咄し仕聞申候

忠治郎弟

一甚三郎

年五十壹

卯ノ十月十七日に御赦免

右之甚三郎三十八年以前方吉利支丹宗門ニ而御座候、法をすゝめ候ハ市ノ宮村道官すゝめ申候と甚三郎申候

治郎右衛門三男

一忠兵衛

年廿七

卯ノ十月十四日に御赦免

右之忠兵衛申分、吉利支丹宗門之法とて誰人ニもすゝめられ不申候、親治郎右衛門三十七年以前ニ、吉利支丹ニ而御穿鑿ニ掛リ申候へ共、ころび申ニ付御赦免被成候而、江(郷)中へ罷歸リ、十三年以前ニ江ニ而病死仕候、親三十七年以前吉利支丹之筋目ニ而、今度之御穿鑿ニ親之筋ニ而わたくし籠合仕候へ共、海保彌兵衛様御意被成候ハ、親之筋ニてもころび候様ニ御意候間、ころび申候に付、御赦免被成、江中罷歸リ候

善左衛門惣領

一小兵衛

年四十九

辰ノ二月廿日に御赦免

右之小兵衛三十八年方吉利支丹宗門ニ而御座候、法をすゝめ候ハ、市ノ宮村兵右衛門と申者すゝめ申候と小兵衛申候

彌藏惣領

一彦左衛門

年四十八

辰ノ五月十五日に御赦免

右之彦左衛門ニ、吉利支丹之法を、丑ノ年五年以前ニ、當村六左衛門すゝめ聞申候と、彦左衛門申候

治郎左衛門二男

一角兵衛

年三十九

卯ノ十月十七日に御赦免

右之角兵衛武藏之年、三十八年己前ニ、市ノ宮村兵右衛門と申者水をかけ、吉利支丹宗門ニ仕候と親申つたへ承候と、角兵衛申候

善左衛門孫

一藤三郎

年(欠)

卯ノ十月十七日に御赦免

右之藤三郎親茂兵衛二十年以前病死仕候節、親申候ハ藤三郎家も吉利支丹宗門ニ而有之様に相心得可申と申聞せ、親ハ廿年以前相果申候、委細ハ覺不申候と藤三郎申候

美濃尾張の切支丹 (柴田 亮)

八五

彦左衛門

一女房

年四十貳

辰ノ五月十五日に御赦免

右之女房ニ法をすゝめ候ハ、當村喜平治すゝめ申候、丑ノ年ノ御僉僕ニ四年前方吉利支丹宗門ニ而御座候由女房申候

彦左衛門惣領

一徳左衛門

年十九

辰ノ五月十五日に御赦免

右之徳左衛門親彦左衛門水をかけ申候由申聞候へ共、いつかけ申候も、いづより吉利支丹宗門ニ仕候も存不申候由、徳左衛門申候

權右衛門養子

一吉兵衛

年廿五

卯ノ十二月十四日に御赦免

右之吉兵衛吉利支丹之法を聞候事、丑ノ年ノ御僉僕三年前ニ當村六左衛門法をすゝめ承候、但シ水ハかり不申由吉兵衛申候

美濃尾張の切支丹 (柴田 亮)

八拾人

高木村

勘四郎

寛文五年巳ノ四月十一日

甚三郎

忠兵衛

荒川孫右衛門様

小兵衛

野呂瀬義兵衛様

彦左衛門

川 濟 惣助様

角兵衛

藤三郎

彦左衛門

女 房

徳左衛門

吉兵衛

高木村

庄や吉右衛門

(114) Pages. P. 73 高山或は高木 (Taughit) に九

名の殉教があつた事を記してゐる。恐く此の愛知縣丹羽郡の高木村を言ふのであらう。

(二十七) 一ノ宮市役所寫本「大久地古事記」

(二十八) 徳川家本「敬公實錄」卷一

八六

(二十九) 姉崎博士「切支丹宗門の迫害と潜伏」第五版

十八頁

(三十) 續々群書類從卷十二ノ内「査祓餘錄」

(三十一) 史學雜誌第一卷、岡田正之氏「徳川幕府吉利

支丹宗門改考」ノ「公私領」參照

(三十二) 徳川家本「敬公實錄」卷二

奥村家本「敬公實錄」卷六には

今年月日不明公義より、御台場所人鈴木嘉兵衛と申者切支丹宗門之由申參り、御吟味御座候處嘉兵衛と申者は無之、又右衛門と申者昨年相果、切支丹宗門之由ニ付、粹權三郎并ニ母姉妹牢舎被仰付御僉議ト云々

(三十三) 徳川家本「敬公實錄」卷二

(三十四) 徳川家本「敬公實錄」卷二 八月二十五日條

丸淵村(中島郡)長右衛門、漆工加兵衛、一宮村孫九郎

係吉利支丹、使江原助右衛門政勝送之江戸、井上筑後

守正重申會食之禁

洞戸村(美濃)民十三郎夫妻、三井村(丹羽郡)喜太郎夫妻係吉利支丹下獄、兵治、與作、八兵衛者亦係吉利支丹、使萩原八太夫茂江送江戸

(三十五) 奥村本「敬公實錄」卷六、六月十日の條

公義より御姫様女中クニ切支丹宗門之由申參入牢御吟

味と云々

(三十六) 「契利斯督記」の「切支丹出申國所の覺參照

(三十七) 前出註(二十五)

(三十八) 昭和元年版「長崎叢書」第四卷「天主教沿革

史」一五頁參照、教徒が長崎の町を焼かうとの陰謀が事實有つたとは考へられない。明暦三年の江戸の大火後の事で人心が何となく不安な幻影に襲はれ勝な時である。

(三十九) 「正事記」吉川本勇卷、奥村本下卷、兩書を校合す。

(四十) 「正事記」の外に「萬治日記」「金府紀較補遺」下卷に召捕の記事あり。尾關巖氏藏本「犬山舊事記」は「正事記」と殆ど同様の記事の後に左の附加的記事ありて、多少參考するに足る。

右五郎丸橋爪村の吉利支丹此邊の張本といへり、犬山町方其外近郷に有之、犬山に擲捕、町奉行にて枋問あり、其輕重に隨ひ或は名古屋に引出され、被誅罰有、或入牢、其處の御預け、雖子孫江戸帳に付たるは重し

美濃尾張の切支丹 (柴田 亮)

其比犬山町奉行支配牢舎日ニ影有之、町奉行の手代四人に成たるは此故とぞ。

江戸帳に付たるは、病死の時江戸へ御達有之、死骸は鹽付にして、御達し不濟、以前は、罪事不成、死骸は役人の改有、取扱至極に重き御政務なり、町方は享保年内に絶たり、五郎丸邊には其後迄も子孫有といへり。(中略)

或説に天草の餘類五郎丸に來り、此近郷に切支丹宗門を進めたるといへり、

東は鹽カタヒラ迄にて奥に切支丹なし、橋爪村より一二里近郷斗り外は少しと言、五郎丸の伴天連長本に必せりと云々

(四十一) 續國史大系本「嚴有院殿御實紀」廿一卷三百七拾九頁

(四十二) 同上三百八十四頁

(四十三) 「瑞龍公御治世記」上卷「正公御側年考錄」卷二「寛文覺書」

五月晦日、御日付海保彌兵衛、吉利支丹奉行ニ初而被仰付、御加増二百石、御足輕二十八御預ケ、江戸へ罷

美濃尾張の切支丹 (柴田 亮)

下、公義吉利支丹奉行北條安房守殿より傳授有之、彼宗之書物等秘決有之云々、依之御目付高力七兵衛儀ハ當役兼帶ニ而、彌兵衛ニ指副相勤候様ニ被仰付、足輕ハ無之、御家中へ御觸廻り、召仕男女等手形を相改御宗門御制法自是及嚴重

三書共に尾藩州第二代徳川光友公治世の重要事件の記録にして、『瑞龍公御治世記』二巻と『正公御側年考録』二巻は殆ど同一物にして、『寛文覺書』は寛文年間のみを書し『瑞龍公御治世記』と全然同一物なり、たゞ外題を異にするのみである。同じく光友公時代の事を書いたものに『瑞廟御事録』四巻がある。上述の書と殆ど同一であつたゞ延寶元年より元祿十四年に至る間の記事で他書より事項多い。『正公御側年考録』は巻頭に目録あり、搜索に便で、全部名古屋市立圖書館の寫本である。

(四十四) 尾張の宗門改については折を見て紹介する。

(四十五) 註(二十四)『赦免書上狀』彦左衛門女房は丑年の御僉儀にかゝつてある。

(四十六) 同上『赦免書上狀』

(四十七) 『瑞龍公御治世記』上巻、『正公御側年考録』壹

丹宗門に罷成候に付、濃州笠松の柳原にて數十人打首の事に候

此節の笠松御代官は名取半左衛門なり。

(四十九) 大日本史料編纂所寫本『尾濃葉栗見聞集』天ノ上巻、同書の別の個處に

或日記ニ云元祿十丁己年濃州可兒郡鹽方村百姓、切支丹の者共御吟味之上、笠松にて御仕置有之、此節大字濱の餘類三十五人、木曾川通り笠松の下爰ニ埋てしもの塚也、今尙大字濱塚としてしもの塚に松あり、と有る、寛文五年北方附近の切支丹の事を誤り傳へしものが、帷子村に切支丹の子孫と思はるゝもの現存するを思へば或は元祿の事かとも思はる。

(五十) 『徳川時代吉利支丹宗門改考』『靈教類典』四ノ十六切支丹、參照

(五十一) 『瑞龍公御治世記』上巻、『瑞廟御事録』卷二『正公御側年考録』二『寛文覺書』

(五十二) 『尾濃葉栗見聞集』天ノ上巻

(五十三) 堅九寸三分横九尺餘

(五十四) 小島三保次氏所藏文書 堅九寸、横一尺二寸

美濃尾張の切支丹 (柴田 亮)

八八

卷『瑞廟御事録』卷二、『金府紀較』、『尾濃葉栗見聞集』四册天ノ上巻

『萬治日記』全の文を左に掲ぐ

今月(十二月)十九日、吉利支丹斬罪被仰付間、ためし物被下置由觸る、此四年以來の吉利支丹召人共今度御成敗男女二百餘、其内男百餘有之と云々、ためし物拜領之衆、竹城州、成俣人七人ッ、志甲州、寺土州六人ッ、山將監、成大膳五人ッ、城代衆三人ッ、御側同心頭、大番頭、兩御用人衆など貳人ッ、御側物頭衆、御側御小姓衆、御國奉行、兩町奉行、吉利支丹奉行、其他御側役人、目付、小納戸、奥番衆迄皆一人ッ、拜領被成候、但在江戸の衆は拜領無之、召人何れも籠屋にて首切、闘斗渡す、但し御老中へは生ながら渡る由、但在江戸にても御老中へはためし物被下是へは首打渡すと云々十九日(廿日は御精進日故除く)廿一日廿二日迄の間、勝手次第ためし物吉利支丹奉行衆より請取候様にとの儀也

(四十八) 『小林日記』

寛文四甲辰年尾州北方并近邊數多の村々の百姓、切支

八分、高木村追込之者共御ち方拂之覺

一米拾九石二斗

内

七石二斗七升四合八勺

此人數七千八百三拾九人 是ハ巳ノ五月朔日方百十七日分

但壹日壹人ニ米成九勺二才餘
此拂帳半右門指上ケ申候

四石六斗五升八合

此人數四千六百五拾八人 是ハ午ノ二月十五日方
同五月十八日迄日數百八日分

但一日壹人ニ米壹合宛
此拂帳半右門指ケ申候

貳石貳升三合

此人數貳千貳拾三人 是ハ午ノ五月十九日方
同七月五日迄日數
此拂帳助右門様四十六日分上ケ申候
右同斷

此金四兩

八斗四升四合四勺

吉右衛門預り

八九

美濃尾張の切支丹（柴田 亮）

九〇

外五斗へうけ取通半右門様上ヶ申管
未ノ正月十一日

高木村庄や
吉右衛門

堅九寸四分、横一尺三寸二分五厘

丹羽郡高木村吉利支丹妻子追之者共飲米之覺

米拾三石九斗五升五合六勺壹才五毛なり

一已之五月一日方同八月晦日まで

此之米樹數七石貳斗七升四合六勺壹才五毛

日數百拾七日也

人數七千八百三十九人

一去年之二月十五日方五月十八日まで

此ノ米四石六斗五升八合

日數百八日也

人數四千六百五拾八人

一去年之五月十五日方同七月五日迄

米二石貳升三合也

日數四拾六日

右惣人數合壹萬四千五百貳拾人

右惣日數合貳百七拾一日

丹羽郡高木村

寛文七年

庄屋吉右衛門卿

未へ正月十一日

御代官

（五十五）『尾濃葉栗見聞集』天ノ卷一卷『瑞龍公御治世
記上卷』正公御側年考錄』卷一『寛文覺書』編年大略』

（五十六）『古義』第五卷『瑞廟御事錄』卷二『金府紀較』

『瑞龍公御治世記』卷二等

（五十七）『吏事隨筆』第四卷、切支丹宗門之事

寛文七末年

在々切支丹宗門之者共男女七百四十五人、外に乳呑子

拾四人、七月二十八日召捕入牢中付候

右召捕には御代官、十人組、手代、御足輕被相越申候

『古義』も略前文に同じ

（五十八）『瑞廟御事錄』

十月切支丹宗門徒在々百姓籠拂斬罪二千人計り、足輕

頭以上被下様物ニス。

『瑞龍公御治世記』正公御側年考錄』寛文覺書』は同文。其
他、『編年大略』金府紀較』尾濃葉栗見聞集』同様の記事あ
り。

（五十九）『古義』第六卷

（六十）『金府紀較補遺』尾濃葉栗見聞集』天ノ下卷

此稿を草するに當り、御教導を忝した姉崎、村上兩博

士、吉利支丹赦免書上狀等の史料の存在等について、多く

の御教示を受けた愛知縣一ノ宮市史編纂掛森徳一郎氏に厚
く御禮申上ます。